

カリフォルニア・ダウン

【プロダクションノート】

「ネバダの地震が変則性でなかったら？ 何かの予兆だとしたら、どうなる？」

——ローレンス・ヘイズ博士

この映画が想定しているのは観測史上、最大規模の地震だ。ネバダ州のフーバーダム付近に潜む未確認の断層帯で群発地震が発生する。その衝撃は州をまたいでカリフォルニアに及び、かのサンアンドレアス断層を刺激。断層は大きくずれ、ロサンゼルス一帯に激震が走る。しかし、揺れはロサンゼルスだけにとどまらなかった。巨大地震の余波は断層に沿って北上し、混乱と壊滅的な被害をもたらせながら、サンフランシスコに達する。

ドウェイン・ジョンソンが演じるのはストーリーの要となるレイ・ゲインズ。ロサンゼルス消防局で捜索救難ヘリのパイロットを務めるレイは、地震の発生を受け、個人的な決意を胸に出動する。二次災害が広がるなか、関係の冷え切った妻、そして一人娘を守り抜こうと心に誓うのだ。「この脚本には引き込まれたよ。感銘を受けたね。最初から最後までのだ元をつかんで放さないという感じだった」とジョンソンは振り返る。「地震は予告もなしにやって来る。地殻変動が起きると、余震ばかりか誘発地震まで発生しかねないから、毎分毎秒、試練が訪れる。だから、この作品には息つく暇もないほどの見ごたえがあるんだ。畳み掛けるような展開だからね」

ジョンソンが続ける。「こういう映画はスケール感が大切。前代未聞の巨大地震をイメージしながら、観客の目にどう映るのか、つねに意識しないといけないんだよ。だけど、レイにとって大切なのはサバイバルだけじゃない。家族をひとつにしようと必死なんだ……いろいろな意味でね」

広範囲に及ぶ災禍と密度の高い人間同士のつながり。その取り合わせに心惹かれたのはジョンソンだけではない。監督のブラッド・ペイトンも同じだった。そのとき本作は製作のポー・フリンのもとで、まだ企画段階の後半にあった。ジョンソン、ペイトン、フリンは以前にも世界的ヒット作『センター・オブ・ジ・アース2 神秘の島』で組んでおり、再びコラボレーションできる今回のプロジェクトを歓迎した。しかも、今回のプロジェクトは前回とは大きく異なる。アクション、スケール、テンションと、どれをとってもケタ違いだ。

ペイトンが言う。「この作品は過去に手掛けたどの作品とも勝手が違う。今までになく大変なんだ。非日常的な題材を扱いつつ、現実味を出さなくてはいけないからね。できるだけ登場人物に血を通わせようと思ったよ。そうすれば、観客は“高みの見物”ではなく、キャラクターと同じ視点でストーリーを追うことができる。アクションとしてはインパクトが大きいけれど、ストーリーの中心には大切な人を思う気持ちがあるんだ」

本作はフリンの企画でスタートした。昔から往年のパニック映画のファンだったフリンは、21世紀のパニック映画を目指し、現代の3D技術と最新の映像技術を駆使して迫真的ビジュアルを制作しようと考えた。それ以外にも今回のプロジェクトには特別な思い入れがあったという。「この作品には大いに共感を覚えました。というのも、ロサンゼルスに越してきてから3週間もしないうちに、ノースリッジ地震を経験したからなんです」とフリンは明かす。「あれほど激しい揺れを感じたのは生まれて初めてだったし、大地震の恐ろしさやパワーが身にしみて分かりました。大地震に直面すると、自分がちっぽけで非力な存在に思える。それに、子供のころからサンアンドレアス断層に興味津々だったんです。僕が育ったところはマイアミで、断層からは4800キロも離れているんですが……。あの断層のことは誰もが心の片隅に置いているんじゃないかな。たとえ、はっきりとは意識できなくてもね。アメリカ人の記憶に染みついているのかもしれない」

製作陣は観客の目を最後まで釘付けにするため、自ら高いハードルを課した。現実の脅威に、映画ならではの創意を加え、臨場感あふれる映像とドラマを完成させようと考えたのだ。作中に描かれることは必ずしも事実どおりではないが、事実を踏まえていることは確かである。

2015年3月、米地質調査所は向こう30年以内にカリフォルニア州でマグニチュード8以上の大地震が発生する確率を引き上げ、複数の断層が連動する可能性も否めないとした。長いこと、監視の目はもっぱらサンアンドレアスに注がれてきたが、ほかの断層でもコンスタントにひずみが蓄積している。例えば、カリフォルニアのオレンジ郡からロサンゼルスダウンタウンまで伸びるプエンテヒルズ断層、カリフォルニア北部からカナダのバンクーバー島に及ぶ深海の断層カスケード沈み込み帯だ。近年は地震動の報告がネバダ、バージニア、オクラホマ、ミズーリ、無名のホットスポット(マグマが発生する場所)など全米各地から上がっており、地球規模で発生している現象を象徴している。米地質調査所によると、世界の地震の観測回数は年間およそ50万回。そのうち有感地震は10万回、災害をもたらす被害地震は100回にも及ぶ。

「僕自身が恐れていることはすべて脚本の中に盛り込みました」と脚本を担当したカールトン・キューズは話す。「ブラッド(・ペイトン)なら、どのシーンもハイレベルに仕上げてくれると分かっていたんですが、期待以上の出来になりました」

壊滅的な巨大地震という広いキャンバスに描かれるのは、人間の心の底に眠る本能だ。それは予測も制御もできない自然の脅威によって目を覚まし、人を求め、大切にしたい気持ちを再認識させる。「災害は人間の底力を引き出すんだ」と監督のペイトンは言う。「一人ひとりが集中力と強みを発揮するからね。普通の人も英雄になり、英雄は自らの限界を超える」

製作のフリンが言葉を添える。「絶体絶命のピンチを迎えたとき、自分だったらどう行動するのか。それが分かっている人はおそらくいいでしょう。この作品では、そこを掘り下げたいと思いました」

レイの本能も徹底的に試される。「家族というテーマ、そして大切な人を守るためにどこまでやれるかというテーマには世界中の人が共感できるんじゃないかな」とレイを演じるジョンソンは言う。

作中では3つのストーリーが同時進行する。最初の揺れがロサンゼルスを襲ったあと、ヘリで出動したレイはダウンタウン境界で妻のエマ(カーラ・グギーノ)を発見。気丈で勇敢なエマは、崩れゆく高層ビルの中でがれきを踏みしめながら屋上に出て、間一髪で救出される。その後、2人は揃って娘のブレイク(アレクサンドラ・ダダリオ)を捜しに行く。向かった先は2度目の揺れに見舞われたサンフランシスコ。距離にして600キロほどある。2人が大急ぎで北上しているころ、19歳のブレイクは被災現場をさまよっていた。もうすぐ義理の父親となるダニ

エル(ヨアン・グリフィズ)が姿を消してしまったのだ。ブレイクは自分の勤と知恵だけを頼りに身の安全を確保しなければならず、出会って間もないベン(ヒューゴ・ジョンストン＝パート)という青年と行動を共にする。

「カーラとアレクサンドラが演じているのは、どちらもたくましい女性であって、かよわき乙女ではありません。そこは重要なポイントでした」と製作のフリンは説明する。「2人とも激しいアクションをこなし、見せ場がたくさんあります。私には娘が2人いますから、女性がこういうキャラクターを演じてくれるのはじつに嬉しい。現実の世界でも、女性が真のヒロインになる場面は多いですからね」

ポール・ジアマッティ扮するローレンス・ヘイズはカリフォルニア工科大学に勤務する地震学の権威。この一連の地震の見通しを立て、さらに大きな災害が発生することを確信する。パサデナにあるヘイズの研究所も震災の影響を受け、停電が発生し、通信手段が断たれてしまう。それでもヘイズは、その場に居合わせたTVリポーターのセレナ(アーチャー・パンジャビ)の助けを借りながら、どうにかして警告を発しようと試みる。「この地震学者のストーリーが全編の進行役となり、震災の状況と経過を説明しています」と脚本のキューズは話す。「(監督)ブラッドは物語をつむぐのが抜群にうまい。ドラマのツボと盛り上げ方を心得ているんです」と製作のフリンは感心する。「そして、ストーリーの焦点をつねに登場人物とその小さなエピソードに戻す。例えば、ブレイクとベンの若いカップルが震災の中で愛をはぐくむ場面や、レイとエマの歴史ある夫婦が最悪の状況下で互いの良さを再確認する場面がそうです」

ペイトンは濃密なドラマを演出すべく、できるだけ多くの要素を現場のカメラでとらえることに決め、スタント、セット、特殊効果を駆使した。その一例が、崩れゆくビルの屋上で繰り広げられるエマの救出劇だ。数分間に及ぶ長尺のシーンだが、ペイトンはこれを一気に撮り上げた。「観客もエマと一緒に倒壊寸前のビルの中を駆け上がることができるんじゃないかな。このシーンはまったくのノーカット。エマと一緒に動き、エマと同じものを見て、次はどこに移動すればいいのか瞬時の判断を迫られる。状況は刻一刻と変わっていくからね。カーラの熱演のおかげでアドレナリンが全開になるし、最初から最後までエマの身に迫る危機をリアルに体感できると思うよ」

同様の臨場感を味わえる場面はほかにもある——山積したがれきが雪崩を打って襲いかかるシーン、崖下に落ちかけた乗用車の車内のシーン、水にのみれるシーン、足元のフーバーダムが崩れ落ちるシーン。

また、おびただしい数の建造物に動きを出すため、1300を超える視覚効果が使われた。その結果、道路はねじれ、橋は折れ、都心のあちこちに火の手が上がり、ビルが倒壊し、そのビルが近隣のビルを巻き込んで巨大なドミノ倒しが起こる。そして、やっと一息つけるかと思った矢先に、今度は15階建てビルに相当する大津波がサンフランシスコに押し寄せるのだ。

主演のジョンソンは監督のペイトンをこう評する。「ブラッドの自慢は持ち前の発想力。セットでは日々、全力投球してたよ。観客の心と目をわしづかみにするにはどうしたらいいのか、いつもアイデアをひねっていたんだ」

【放すな——お互いの手を放すな】

「しっかりするんだ。今、助けに行く」——レイ

足元を揺さぶる惨禍が幕を開ける前から、捜索救難ヘリのパイロット、レイ・ゲインズの人生の基盤は揺れていた。別居中の妻のエマから離婚届を渡されたのだ。ある程度は覚悟していたとはいえ、これで本当に夫婦関

係が終わる。もっと努力していたら、救えたかもしれない関係だったが……。レイは最初の地震が発生する数時間前に、エマが恋人のダニエルと同居する予定であることを知る。それだけではない。そのダニエルが娘のブレイクを北カリフォルニアの大学まで送り届けることになっているというのだ。だが、その役目はレイ自身が果たすつもりだった。「レイは、心と志のある、じつに殊勝な男なんだ。役者にとって理想的な役どころじゃないかな」とレイを演じるジョンソンは言う。「毎日、危険に直面している志高き善男善女の1人として、レイも人を守り命を救っているんだ。けれども、密かに悩んでいる。離婚問題を抱えているんだ。経験者なら分かると思うけれど、離婚は本当に辛い。とくに子供がいる場合はね」。自身も父親であるジョンソンはこうつけ加えた。「俺だって、娘を守るためなら何だってやるよ」

レイと妻、レイと娘の関係はストーリーの主軸だ。監督のペイトンは、ジョンソンのおかげでレイのストーリーに厚みが増したとたたえる。「ドウェインは世界屈指のアクションスターというだけでなく、チャームングでユーモアがあり、親しみやすい。そんな人柄をレイというキャラクターでも見せてくれたんだ。この役を完全に自分のものにして、ドウェインならではの個性で演じてくれた。おかげでレイという男に深みが出たよ」

ペイトンが続ける。「ヒーローには2種類ある。ひとつは向かうところ敵なしで、壁さえすり抜けてしまう超人タイプ。もうひとつは、パンチを食らっても勢いよく立ち上がり、誰もが憧れるタイプ。レイは、ある意味、どちらにも当てはまるんじゃないかな。不可能を可能にして“すごい！”と思わせる瞬間もあるけれど、一方では欠点があり、悩みを抱えている。レイは過去の失敗を挽回しようとして、その方法を必死に手探りしているんだ。ドウェインが演じるレイは誰もが共感できるし、応援したくなるよ。それと同時にレイの能力の高さに圧倒されるんだ。そして、もちろん、誰もがドウェイン・ジョンソンに憧れるだろうね」

製作のフリンも同感だ。「ドウェインの姿勢は『どうしたら、この男を生きられるか。どうすれば、この役に血を通わせることができるか』であって、役を“作る”とか“装う”とかいう次元ではありませんでした。その姿勢に興奮を覚えましたよ。これまでドウェインが演じたことのない、弱さや人間味が見られるわけですからね」

エマの近況を知ったレイは、未練をのぞかせつつも、エマの幸せを第一に考える。新しい一歩を踏み出すことで彼女が幸せになるなら、それでいい。

エマ役のカーラ・グギーノが説明する。「2人の仲は今でも決して陰悪じゃないわ。別居の理由はいずれ明かされるけれど、それは愛情が冷めたからではなく、ある悲劇に見舞われたからなの。2人はその出来事を受け止めることも、忘れることもできなかった。だから夫婦として成り立たなくなっていくたの」

「カーラには非の打ちどころがありませんでした」と製作のフリンは言う。「タフでセクシーでドウェインと互角に渡り合える。彼女が演じるエマは怖いもの知らず。娘を見つけ出すためなら、何事にもひるみません」

精神的にも、肉体的にも消耗の激しい役どころについて、グギーノ自身は「エマを演じるのはいい意味で大きな挑戦だったし、いろんな意味で大変だったけれど、とても貴重な経験になったわ」と振り返る。

最初の地震がロサンゼルスを襲い、ダウンタウンの高層ビル群を激しく揺らしたとき、エマはそのビルの1つの上階で食事をしていた。エマが助けを求めた相手は、やはり、レイだ。そして、レイもエマの期待を裏切らない。レイはビル全体が倒壊する寸前でエマを救出するが、地震の余波がサンフランシスコ一帯に及んだことを知る。2人は心をひとつにし、同じ目的に向かう——それは娘を捜し出すこと。そのころ娘のブレイクは被災したサンフランシスコの街中をさまよっていた。

2人にとって危険で無謀な冒険だった。余震や二次災害に行く手を阻まれながら、2人は使えるものすべて、ヘリ、飛行機、トラック、モーターボートとあらゆる移動手段を利用する。そしてサンフランシスコに向かう途中で

我が身を省みるのだ。「おかしなものだよ。将来の方向が決まったと思ったら、ある出来事をきっかけに突然、方向転換を迫られる。人生観まですっかり変わってしまうんだ」とジョンソンは指摘する。

数百キロ離れたサンフランシスコの地下駐車場では、潰れかけた車の中でブレイクが恐怖に震えていた。車外に出た彼女は冷静さを取り戻そうと必死になる。両親に電話しても、すぐに通信が途絶えてしまうが、父から教わったサバイバルの方法を思い出し、それを頼みの綱にする。

「人生、何が起こるか分からない。一寸先は闇だわ」とブレイクに扮するアレクサンドラ・ダダリオは話す。「ブレイクがパパに習ったスキルを活用して、今までにない一面を発揮するのは興味深かった。自分にそういう一面があるなんて、彼女自身も知らなかったんじゃないかしら。ブレイクは強くて、すごくタフで、賢いけれど、誰もが共感できる普通の女の子でもあるわ。もちろん、ドウェインの娘を演じていたから、普段の自分よりも強くなれる気がしたの」

「アレクサンドラは聡明で、演技力があり、努力家です。彼女がオーディションにやってきたとき、ブレイク役は決まったと思いました」と製作のフリンは明かす。「ドウェイン・ジョンソンの娘として説得力を出すのはたやすいことではありませんが、アレクサンドラとドウェインの相性はピッタリでした」

ブレイクは父親のアドバイスを胸に、がれきや余震に足止めされながらも、コイトタワーに向かう。このタワーはサンフランシスコでもっとも背の高い名所だ。ブレイクはここでレイとエマと落ち合う約束をした。しかし、ブレイクはひとりではない。シャイで勇敢なベンという連れがいる。このイギリス青年のベンをオーストラリア出身のヒューゴ・ジョンストン＝バートが好演している。ベンは企業面接と休暇を兼ねてサンフランシスコに来ていた……お呼びでない弟と一緒に。ブレイクと出会ったのは超モダンな高層ビルのロビーだった。いい雰囲気では話が進み、ブレイクは別れ際に自分の電話番号をベンに教える。それからほどなくして、ビルのあちこちが崩れ始めるが、ベンは出会ったばかりの友達を見捨てるわけにはいかなかった。

「ベン是世界一ツいてない男だよ」。ベン役のジョンストン＝バートが役柄と同様に、軽妙なユーモアを交えて話す。「休暇を取って、企業面接を受けに来て、せっかくなら美人から電話番号を教えてもらったっていうのに、こんな災難に見舞われるんだから」

窮地に立って初めて、誰が頼りになるのかが分かる。ブレイク、ベン、ベンの生意気な弟オリー（アイルランド出身で12歳のアート・パーキンソン）は即席のチームを結成し、お互いに助け合い、支え合う。「地震に見舞われた3人は一致団結して前に進むの」とブレイク役のダダリオは言う。

ベンとオリーにとって、ブレイクと行動を共にするのは大きな賭けだ。ほかの人が反対方向に避難するなか、ブレイクはひたすら父親を信じ、コイトタワーを目指す。

ブレイクたちが目的のタワーに近づき、レイとエマがなりふりかまわずサンフランシスコにたどり着こうとしているころ、パサデナのカリフォルニア工科大の研究施設では緊張が高まっていた。地震学者のローレンス・ヘイズは、今回の地震が発生する以前から、その前兆と見られる現象に注目し、データの分析やセンサーの監視に努めてきた。その現象がネバダを揺さぶり、フーバーダムを破壊し、サンアンドレアス断層を動かしたのだ。

ヘイズの見立てが正しいなら、ヘイズのライフワークは実を結ぶことになるが、それは被害がさらに拡大する可能性を示唆していた。「ローレンス・ヘイズは優秀な科学者で、地震研究の最前線にいるんだが、異端児的な存在でもある」とヘイズに扮するポール・ジアマッティは指摘する。「ローレンスはある学説を確立するために、地震の前兆を追い、その経過を観察し、次の巨大地震を予測しようとしているんだ」

使命感に燃えるヘイズは収集したデータから再び大地震が発生することを確信し、一刻も早く、広く、警戒を呼びかけようとする。そこに現れたのがTVリポーターのセレナだ。「セレナはネバダで地震が発生したのを受けて、取材に出るの。緊急の仕事としてね」とセレナを演じるイギリス人女優アーチャー・パンジャビが説明する。「それでカリフォルニア工科大のローレンスに話を聞きに行くんだけど、インタビューの最中に今度はサンアンドレアス断層が影響を受けて、ローレンスの研究チームともども震災に巻き込まれる。これはセレナに限らず、世界中のジャーナリストにとって、一世代の特ダネだわ」

エマの恋人で建築家のダニエルをヨアン・グリフィズが演じている。ダニエルも極限状態のなかで意外な本性を表す1人だ。最初は好人物そのもので、エマとブレイクに心と自宅を開放し、ブレイクを大学まで送り届ける役目を多忙なレイに代わって引き受ける。この役を演じるグリフィズは言う。「その車中で、ダニエルは素直な気持ちをブレイクに打ち明けるんだ。今まで仕事にかまけて父親になる機会を逸してしまったけれど、こうしてブレイクがそばにいてくれることが本当に嬉しいと。ブレイクも正直なダニエルに好意を感じて、家族として受け入れてもいいと思いはじめたんだ」

ところが、ダニエルは肝心なときに頼りにならなかった。「人を助けるために燃えさかるビルの中に飛び込んで行く男もいるけれど、ダニエルはそうじゃない」とグリフィズは言う。「それまでダニエルは自分のことを英雄タイプだと思っていただろうね。なのに、いざ生きるか死ぬかの事態に直面したら、正反対の行動を取ってしまうんだ」

だからと言ってダニエルが悪い人間とは限らないが、「同じ状況に置かれたら、自分ならどうするか……と誰もが考えずにはいられないと思う」と監督のペイトンは指摘する。

【セット、スタント、効果】

「高い所に移動するんだ。コイトタワー、覚えてるか？　そこで会おう」——レイ

セット、ロケーション、スタント、特殊効果や視覚効果——シーンを構成する各要素に対してペイトンの考えは一貫していた。それは、各要素をできる限り本物に近づけ、一枚の画として仕上げること。そこでペイトンはCG技術を駆使しつつも、多くの要素を実写に収めようと考えた。これほどのスケールの映画としては異例の試みだ。

「地面に足をつけていたのは、のべ3日くらいかな」とペイトンが振り返る。「あとは水の中か、モーターボートやヘリコプターのセットの上にいるからね。モーターボートのシーンは、水しぶきを上げながらのスタントを含めて、1週間がかりで撮り上げたんだ。グリーンスクリーンをバックにしてね。ヘリのシーンにも1週間かけて、次は飛行機のシーンに移った。かなりワイルドな日々だったよ。とにかく移動の連続だったけど、頻繁にギアチェンジできたから、作品にとっては良かったんじゃないかな」

また、ペイトンはタイプの異なる映像要素を束ねて1つのシーンをデザインする過程をこう語る。「例えばCG映像を検討する場合、それがボートに乗った人物の肩越しに見える小さな景観だったとしても、グリーンスクリーンをバックに撮った実写映像もすべて出力してくれるように編集者に頼んだんだ。そうすれば、CG映像にどの程度のスピード感を出したらいいか分かる。各ショットをデザインするにはほかの要素との兼ね合いを考えなくちゃいけない。映像要素としてはピリビズ(シーン全体のシミュレーション映像)、コンポジション(シーンの枠組

みに相当する映像)、ロケーションの実写、視覚効果のCG映像と4タイプあるんだけど、それはあくまでも基本。これほどの規模の映画となると、ほかにも入れ込まなければいけない要素は多々ある。シーンによっては15もあったよ。とにかく、1つのシーンに“動くパーツ”がたくさんあるんだ」

VFXプロデューサーのランドール・スターは過去にも2本のペイトン作品を担当した。「今回はほぼすべてのショットに何らかの視覚効果が必要でした」とスターは言う。「きれいな壁に亀裂を走らせたり、シーンの緊張感を盛り上げるためにコンクリート片をパラパラ降らせたりといった小さな効果もあれば、完全にCGで制作した津波、ビル、橋などもあります。大小さまざまな効果を制作しました」

ペイトンが好んで使ったのは奥行きをもたせる撮影技法だ。これにより被写体がカメラから遠ざかり、またカメラに迫ってくるように見える。「2D映像でも躍動感が出るけれど、3Dだともっとすごい。登場人物と一緒にって階段を駆け降りているような臨場感があるからね。もともと優れた技法だけれど、3Dに使うと、その良さがさらに引き立つんだ」

製作のフリンが2008年に放った『センター・オブ・ジ・アース』は高解像度の3D技術を導入した初の長編映画だ。フリンはその技術を今回も採用することにした。「僕は3D技術の大ファン。その技術は進化の一途をたどっています。今回は震災映画として初の3D作品にしたかった。映画館に行く醍醐味をつねにグレードアップさせることが、映画人としての務めだと思っています」

撮影隊はロサンゼルスとサンフランシスコの景観を多数カメラに収めたあと、オーストラリアのクイーンズランド州南東部に移動してゴールドコーストの実景を撮影した。さらにオーストラリアでは、ビレッジ・ロードショー・スタジオのサウンドステージに大がかりなセットを建設。その1つが表面積約1300平方メートルに及ぶタンクだ。撮影用の水槽としてはオーストラリア最大にして世界有数の大きさを誇り、容量は約570万リットルに達する。

<ロサンゼルスの高層ビルを舞台にした救出劇>

ロサンゼルス一帯が激しい揺れに襲われたとき、エマはダウンタウンの高級レストランにいた。その店はシックでモダンな(架空の)高層ビルの上階にあり、ダウンタウンが一望できる。

美術のバリー・チューシッドは上品でクラシックな店内をイメージし、シャンデリア、池、鉢植えのほか、円柱や大理石のバーカウンターなど豪華なインテリアをあしらった。こうした内装はすべて“動線”を意識して配置された。監督のペイトンは特殊効果監修のブライアン・コックス、スタント監修のアラン・ポプルトンに協力を仰ぎ、パニックに陥ったレストランの客が出口に殺到するシーンを準備した。

そして、エマの視点で始まる一連のシーンをノーカットで撮り上げた——自分の身に起きていることに気づいて愕然としたエマは、どうにかレストランを脱け出し、階段を上り、屋上に出て、レイの操縦するヘリに迎えられ、その間にもそこかしこでビルの崩壊が進む。エマはふらつきながら、砕けたコンクリートの山によじ登るが、山は激しく揺れて崩れ、その下には吸い込まれそうな大きな穴が開く。

「エマが屋上に向かおうとしたとき、ビルの3～4階分が一気に潰れるんだ」とペイトンは説明する。「エマはがれきの中から這い出たものの、ビルが潰れた衝撃で、ずり落ちてしまう。この撮影は段取りが大変だったよ」

スタント監修のポップルトンは、カーラ・グギーノらに大きな試練を与えたこのシーンについて「現場では、この撮影に使った装置を“パンケーキ・リグ”と呼んでいました。高く大きなパンケーキのイメージです。その上にカーラを乗せ、ビル4階分に相当する高さから落とし、また上までよじ登ってもらいました」

グギーノは「ハンディカメラのオペレーターと一心同体になって、数日がかりで撮影に臨んだわ。エマが上へ上へと進むシーンを一気に撮るためにね」と振り返り、当時の撮影を舞台での演技に例える。「私は舞台作に頻繁に出ているんだけど、舞台に立っていると綱渡りをしているような気分になるときがあるの——途中で飛び降りるわけにはいかない、前に進むしかないんだと。そう思うと、アドレナリンと集中力がワッと出てくる。それは、このシーンの撮影中にも感じたわ。こういう撮り方を思いつくなんて、(監督の)ブラッドのひらめきは大したものね」

「一連のシーンではタイミングが課題でした。あらゆるものが次から次へと連鎖的に動きますから」と特殊効果監修のコックスは説明する。最初はグラスの水がかすかに揺れ、テーブル上のナイフが小さく跳ねる程度だったが、やがて四方の壁に亀裂が走り、ガス管が破損して厨房から炎が吹き出る。「店内の鉢植えや池はレールの上に載せ、手動で揺さぶりました。テーブルや椅子にはそれぞれ違う動きを出し、動く頻度にも差をつけました」

コックスの創意は視覚効果チームにも引き継がれた。VFXプロデューサーのスターは「シーン全体を複数のパートに分けて作業を進め、あとで1つにまとめました」と話す。なかでも、ロサンゼルス市景観にCGで変化をつける作業では徹底的にリアルを追求したという。「ダウンタウンの建造物の多くは築年数が違います。すぐに倒壊するビルがある一方で、近年に建てられたものは耐震性があり、上部が大きく揺れるのではないかと——そういう点も効果に反映させました」

レイが操縦するヘリコプターも“動くパーツ”の1つ。ヘリのシーンはグリーンスクリーンを背景にサウンドステージにて撮影された。美術のチューシッドが“ヘリコプター・ロデオ”と名づけた撮影用の機体は、ロサンゼルス消防局の救助ヘリをモデルにして製作され、装置の上に設置された。のちに、この上にはモーターボートが設置され、レイとエマが津波をぬって海上を進むシーンの撮影に使われた。

「今回の撮影では、翼や車輪の付いた乗り物のなかで運転しなかったものは何一つなかったね。ボートの操縦までさせてもらったよ」とレイ役のジョンソンは言う。「俳優は『自らスタントを演じました』と言うのが好きなんだ。僕には長年世話になっている優秀なスタントマンがいるけれど、今回はカメラの前で、しかもカットなしで演じるシーンが多かったから、スタントの大半は自分でこなさなければいけなかった。ヘリコプターから懸垂下降する場面もそうなんだ」

ジョンソンをはじめ、映画の冒頭に登場するレイの同僚を演じた俳優たちを指導したのは、豪クイーンズランドの非営利法人ケアフライトだ。この法人はヘリコプターを使った人命救助を活動の一環としている。キャストに対して出勤時の基本手順、道具、装備、チーム単位での活動を指南したほか、撮影時にはベル412ヘリコプターを貸し出し、格納庫を使わせてくれた。

「ヘリのパイロットたちと長い時間を過ごしたよ。操縦を教わるだけでなく、彼らの頭の中ものぞいてみたかったんだ」とジョンソンは明かす。「仕事に対する姿勢とか、考え方とか、どうしたら私情を挟まずに任務を遂行できるか、とかね。こういう災害時に平常心を失うのは人間の常だと思うんだ。だけど、彼らは大した戦士だよ。一緒に過ごした時間はかけがいのない時間になった」

<サンフランシスコ——の高層ビル“ゲート”での地震>

高台を求めてサンフランシスコをさまよっていたブレイクは“ゲート”にたどり着く。このゲートも架空の建造物だが、作中ではダニエルが設計した建設中のビルとして登場。この中にブレイク、ベン、ベンの幼い弟オリーは避難する。3人が14階あたりまで上ったとき、大津波がサンフランシスコをのみ込み、ゲートにも押し寄せ、3人はさらに上への避難を余儀なくされる。屋内の水位が増し、すでに傾きかけたビルを余震が容赦なく襲う。ブレイクは重い落下物に阻まれ、アトリウムから出られなくなってしまう。残っている空気は……ほとんどない。

この一連のシーンは主に12階と15階の間で展開する。そこで、セットを担当するチームは3つのフロアの建設に専念し、それ以外の増設部分、窓、外の景色といった数多くの詳細を視覚効果に委ねることにした。3人のセットデザイナーは美術のチューシッドと連携しながら作業を進めた。そのうちの1人であるニック・デアは「まずは、セットを載せてタンクに沈められるプラットフォームを建造しなくてははいけませんでした」と話す。「構造部分が大きく、数週間かけて特製のスチール製の梁(はり)をトラス構造に組み立て、それからようやくセットの製作に取り掛かりました。このプラットフォームは4台の昇降装置の上に設置していて、11度くらいまで傾けられるんです。私たちの計算では被災後のゲートは15度ほど傾くことにはなりますが、そこまで傾くと、歩くのが困難になってしまう。そこで撮影隊のために傾斜角度を加減しました。実際に稼働させたときは3度か6度か9度でしたね」

「一番の課題は全体の重量でした」と特殊効果監修のコックスが言う。「最終的には105トンに達しましたから。プラットフォームが沈み込まないように、途中で下にエアバッグを入れました」

プラットフォームの上げ下げは、その時々水位によって決まる。また、必要に応じて約34立方メートルのコンテナから大量の水が注入された。例えば、ダメージを受けた建物が急に傾き、海水がどっと流れ込んでくる場面だ。そこで、美術チームにも工夫が求められた——セットにしつらえるものすべてに防水加工を施すか、あるいは、塩素に1カ月間耐えられるだけの素材を用いなければいけない。しかも、その大半をしっかりと固定する必要がある。美術チームは水の抵抗をやわらげるために大道具に穴を開け、水の通り道をつくった。

キャストは大勢のスタッフ、スタントマン、ダイバー、ライフセーバーを伴い、水中で長時間を過ごした。「タンクでの撮影は半端じゃなかったわ」とブレイク役のダダリオは振り返る。「すごい水圧で押し戻されてしまうの。大量の水を体に受けたときの衝撃と驚異は生々しかった。いつでも脱出できるのは分かっていたけれど、それでもブレイクの恐怖をすぐに実感できたわ」

<そのほかのセット——山道の崖、駐車場、カリフォルニア工科大学>

本作の前半には、救助隊員としてのレイの技能、思いやり、度胸の良さが分かるシーンがある。この中でレイのチームは、道路から崖下に転落しかかった乗用車から運転手を救出する。このシーンはオーストラリアでロケーション撮影され、約15メートル四方の崖のレプリカがオープンセットとして使われた。このレプリカは米サンタモニカ山地の山道沿いの一角を精巧に再現したものだ。スタッフは近隣の採石場で崖のゴム型を取り、それを木製の台に貼り付け、その上から出演者のためにコンクリートの足場を設け、本物の草木を接着して周囲に土をかぶせた。

また、スタッフは数本のケーブルを使って乗用車を崖の壁面に固定し、徐々に壁面を滑落させた。そして実物のヘリコプターをクレーンで吊るし、“挨拶代わりに帽子を軽く上げる”程度の角度を付けて空中停止させ、出演者やスタントマンが懸垂下降できるように工夫した。

その後、ストーリーはサンフランシスコに移り、落下した梁の下で車中に閉じ込められたブレイクが必死になって脱出を試みる。このシーンは豪クイーンズランド州カブリ半島の駐車場で撮影され、美術のチューシッドはここに非常灯、スプリンクラー、信号などを設置。駐車場の柱については、地震の影響でコンクリートが剥がれ落ち、金網や鉄筋がむき出しになった状態をデザインした。走行中の車が道路の割れ目に落ちる場面でも実写とCGが併用されている。撮影時は、スタントマンが約1.5キロの距離を猛スピードで走行し、下段の地面に着地してみせた。使用した車には、落下の衝撃に繰り返し耐えられるように、ゴム製のルーフが取り付けられた。

米ネバダ州のフーバーダムが被災するシーンでは、オープンセットの道路とトンネルの一部を使用。前者はオーストラリアのテーマパーク“アウトバック・スペクタキュラー”の駐車場に建設され、後者はサウンドステージの起振台の上に設置にされた。のちに視覚効果チームが両者にCG処理を施し、ダムが割れ、道路が崩壊する映像が完成した。サンフランシスコの象徴ゴールデン・ゲート・ブリッジが崩落する場面も同様にして仕上がった。まずは崩れやすい素材を使って全長約17メートルの橋のレプリカを作り、それを両サイドから撮影した実写映像をCGで処理している。

地震学者ローレンスのオフィスとカリフォルニア工科大の研究室では、ローレンスと研究生たちが情報の収集に努める。その間にも余震は続き、停電が発生し、一行の身に危険が迫る。オフィスと研究室のセットは豪ブリスベンのアーチャーフィールド空港の一角に建設され、その隣のスペースにはレイが勤務するロサンゼルス消防局のセットが設置された。3人のアートディレクターの1人であるジャシント・レオンは「その空港の一角はつくりも内装も1950年代風で、(美術の)バリーはとても気に入っていました。塗装されたコンクリートの柱やリノウムの床もありました」と説明する。

ローレンス役のポール・ジアマッティは出演シーンのほとんどをここで撮影した。「ブラッドはできるだけ多くのアクションを現場で収めようとしていた。僕たちキャストがセットに腰掛けている間、スタッフがあちこちの机を揺さぶり、電灯は大きく揺れて飛ばされる。おかげで僕たちキャストは、すぐに役に入ることができたんだ」

ドラマチックな結末を迎える本作だが、そこに至るまでに地獄を経験するのは登場人物だけではなかった。その衣装もまたしかりだ。本作はほぼノンストップでストーリーが展開するため、キャストのほとんどが同じ服装で通す。衣装のウェンディ・チャックは同じアイテムを何着も用意し、それぞれに加工を施して、汚れ具合や傷みの程度に差をつけた。「血、ほこり、傷をつけて、あらゆる劣化の過程を表現しました」とチャックは言う。「キャストが身に着けているものを見れば、ストーリーの進み具合が分かると思いますよ」

【夢のカリフォルニア】

監督のペイトンがスコアを構想するにあたって頼りにしたのは、『センター・オブ・ジ・アース』『センター・オブ・ジ・アース2 神秘の島』でも組んだ作曲家のアンドリュー・ロッキングトンだ。ペイトンはできるだけ早い段階でスコアに取り組みうと考えた。「曲調やサウンドを参考にしながら作品の世界を構築するのが好きなんだ」とペイトンは言う。「今回はユニークで、壮大で、情感あふれるスコアにしたかったから、さっそくテーマの選曲に入り、

作品のムードに合うサウンドを探したよ。キャラクター別の、あるいはシーン別のテーマが決まったら、あとは“この場面はキャラクターの視点でとらえるべきか、もっと広い視野で伝えるべきか”決めることができるからね」

ユニークな着想で知られるロッキングトンは、この作品にふさわしい音源を見つけた。それは、1年前のサンアンドレアス断層の波形データだ。「活用したのは米地質調査所がリアルタイムで観測した地震活動のデータです。データから拾った震動を加工すると、おもしろいサウンドになることが分かりました」とロッキングトンは話す。「加工したサウンドは多用せずに、ちりばめる程度にしました——とくにカリフォルニア工科大を舞台にしたシーンにね」

不協和音が欲しいときは、こんな方法を試した。「使い古したピアノを調達してきて、それをハンマーとワイヤーカッターで壊しました。ハンマーでピアノを叩く音を録音しようと思ったんです。そのときの音はオーケストラの演奏に混じって作中で流れます。録音したあと、壊れたピアノの前に座ってキーを叩いてみました。すると、音は出るが、イメージとは全然違う。もはやピアノの音ではなくなっていました。つまり、ここに突如として新しい楽器が誕生したわけです。この新生ピアノが奏でる音色は一部のシーンに使用しましたが、けっこう耳に残ると思います。独特のリズムを刻んでいますよ」

ストーリーのテーマが“恐怖と破壊”から“忍耐と希望”に変わるところでは少年たちの合唱が響いてくる。その主旨についてロッキングトンは「その歌声が進行中の出来事を通り抜け、キャラクターの心と不屈の精神に深く染み入るのをイメージしました。本作の主題歌も惨禍を超越するほどの美しさがある。弦楽器の音が響き渡ります」

その曲調にマッチする歌唱を披露するのは、グラミー賞に連続ノミネートされ、世界のヒットチャートをにぎわすシーアだ。本作のためにオリバー・クラウスのプロデュースのもと、1960年代の名曲「夢のカリフォルニア」をカバーした。その歌声はストーリーの結末とエンディング・クレジットを飾るにふさわしく、壮大なフィナーレに込められた万感の思いと未来への希望をみごとに表現している。

「キャラクターの体験を掘り下げるといって意味で、音楽とともにストーリーを語ることは、キャラクターと同じ目線に立つことだと思っている」と監督のペイトンは言う。その信条は全般的に功を奏したと言えるだろう。「激しいアクション、ビルの倒壊、街をのみ込む津波——そのなかにロマンスや心の絆や家族再生の物語があるんだ」

「こういうストーリーは伝えがいがあります。高いテーマ性と豊かな情感がありますから」と製作のフリンは話す。「この作品には力強いメッセージがたくさん込められています。また、娯楽作品としても大いに楽しめる。何が人を英雄にするのか——個人的には、そのテーマに魅了されます」

主演のドウェイン・ジョンソンが締めくくる。「ここに描かれているのはアクション、ラブストーリー、ドラマ、英雄伝。そして人間にとって最大の脅威——大自然なんだ」

[キャスト]

ドウェイン・ジョンソン(レイ)
カーラ・グギーノ(エマ)
アレクサンドラ・ダダリオ(ブレイク)
ヨアン・グリフィズ(ダニエル)
アーチャー・パンジャビ(セリーナ)
ポール・ジアマッティ(ローレンス教授)
ヒューゴ・ジョンストーン=バート(ベン)
アート・パーキンソン(オリイ)

[CAST]

DWAYNE JOHNSON (Ray)
CARLA GUGINO (Emma)
ALEXANDRA DADDARIO (Blake)
IOAN GRUFFUDD (Daniel)
ARCHIE PANJABI (Serena)
PAUL GIAMATTI (Lawrence)
HUGO JOHNSTONE-BURT (Ben)
ART PARKINSON (Ollie)

[スタッフ]

ブラッド・ペイトン(監督)
ポー・フリン(製作)
カールトン・キューズ(脚本)
アンドレ・ファブリツィオ(原案)
ジェレミー・パスモア(原案)
リチャード・ブレナー(製作総指揮)
サミュエル・J・ブラウン(製作総指揮)
マイケル・ディスコ(製作総指揮)
トビー・エメリッヒ(製作総指揮)
ロブ・コーワン(製作総指揮)
トリップ・ビンソン(製作総指揮)
ブルース・バーマン(製作総指揮)
スティーブ・イェドリン(撮影)
バリー・チューシッド(美術)
ボブ・ダクセイ(編集)
アンドリュー・ロッキングトン(音楽)
ウエンディ・チャック(衣装)

[STAFF]

BRAD PEYTON (Director)
BEAU FLYNN (Producer)
CARLTON CUSE (Screenplay)
ANDRE FABRIZIO (Screenwriter)
JEREMY PASSMORE (Screenwriter)
RICHARD BRENER (Executive Producer)
SAMUEL J. BROWN (Executive Producer)
MICHAEL DISCO (Executive Producer)
TOBY EMMERICH (Executive Producer)
ROB COWAN (Executive Producer)
TRIPP VINSON (Executive Producer)
BRUCE BERMAN (Executive Producer)
STEVE YEDLIN (Director of Photography)
BARRY CHUSID (Production Designer)
BOB DUCSAY (Film Editor)
ANDREW LOCKINGTON (Composer)
WENDY CHUCK (Costume Designer)

2015 年 アメリカ映画 / 2015 年 日本公開作品 / 原題: SAN ANDREAS

上映時間 114 分 / スコープサイズ / 3D+2D / 5.1ch リニア PCM+ドルビーサラウンド 7.1 (一部劇場にて)

字幕: 杉田朋子 / 映倫区分: G / 配給: ワーナー・ブラザース映画